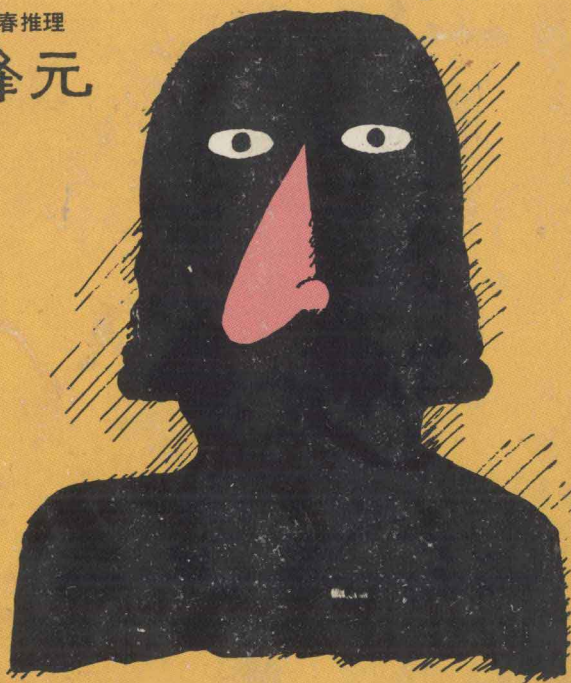


# パスカルの鼻は長かった

ユーモア青春推理

小峰元

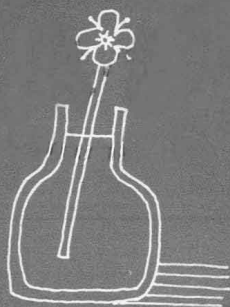


---

パスカルの鼻は長かった

---

小山峯元



講談社

著者略歴

大正10年3月神戸に生まれる。昭和16年大阪外国語学校(現、大阪外大)西語部卒。貿易商、教員等を経て、昭和18年毎日新聞社入社。現在、同社大阪本社編集委員。

現住所・大阪府豊中市岡町北3-7-30。「アルキメデスは手を汚さない」にて昭和48年度江戸川乱歩賞を受賞。

主な著書(講談社刊)

- 「アルキメデスは手を汚さない」
- 「ピタゴラス豆畑に死す」
- 「ソクラテス最期の弁明」

パスカルの鼻は長かった

第1刷発行 昭和50年6月20日

第3刷発行 昭和50年8月20日

著者 小峰 元(こみね・はじめ)

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替 東京3930

印刷所 豊国印刷株式会社  
製本所 株式会社国宝社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

© HAZIME KOMINE 1975 Printed in Japan  
定価はカバーに表示してあります。(文2)



目次

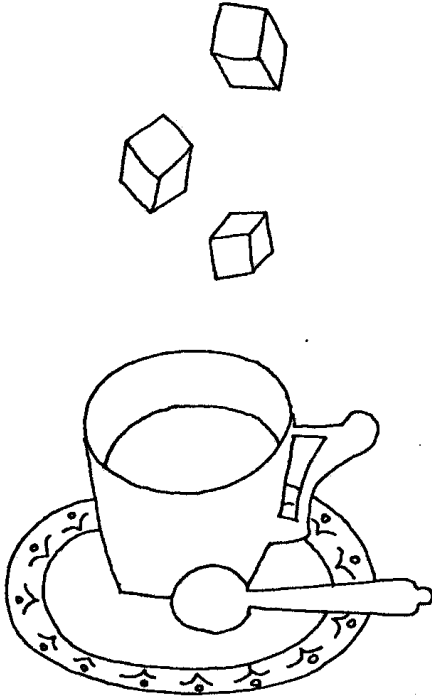
四月は立志どき	6
五月には初のキス	22
六月はストリーキングで	38
七月はヌード開き	58
八月は水中の決闘	76
九月はコロシの季節	104
十月は初恋狂乱	120
十一月は受験勉強スト	148
十二月にスター誕生	162
正月は受験戦線異状あり	182
二月は別れも愉し	200
三月には大願成就	214

装帧・中扉イラスト  
和田誠

パスカルの鼻は長かった

これは、おれが学習研究社の雑誌『高3コース』に、昭和四十九年四月から五十年三月まで連載したのを、まとめたものである。

四月は立志どき





## 1

「諸君は、本日より高校三年生である」

と、エレ公は氣どった声でいって、おれたちを見回した。

当たり前だ。さっき始業式が終わったばかりだ。涙が出るほど惜しかったが、授業料だって前納している。おれが三年生になったことは、Aの次がBで、その次にはCが来るのと同じくらい確かなことだ。なにもエレ公に念を押してもらうことはない。教師というやつは、当たり前のことを、もったいぶってという人種らしい。

「十有五にして学に志す」

とエレ公は、一段と声を張り上げた。悪い癖だ。なにかというと、名言を持ち出す。エレ公は英語の教師だ。実力のほどは、この際、問わないにしても、とにかく英語を教えて、何等給の何号給かをかせいでいる。なら、シェークスピアか、せめてジェームズ・ボンドあたりの名セリフを、英語でいえば、まだかわいげがあるんだが、たいていは論語か孟子だ。

理由はわかっている。専門外の漢籍についても、かくも博学であるぞ、ましてや専門の英語では、というデモなんだ。そんなコケ脅しに、ひっかかるおれなものか。

「十五歳のとき、諸君は伝統あるわが大八州高校に入学した。つまり学に志したわけだ。そして二年。いまや最終学年にはいった。志した学がはたして成るかどうか、これからの一年が……」

と、ここで、もう一発、名言を引用するつもりだったのだろうが、ぐっ、と詰まった。ゆうべ『式辭に使える名言集』で仕込んできたのを、ど忘れしたとみえる。だから、シロウトの一夜漬は危ない。一夜漬でテストを切り抜けるには、おれくらいベテランの年季のはいったベテランでなくちゃ、無理というものだ。案の定、

「競馬でいえば、第四コーナーを回ったところだ」

がたっと格調が落ちた。論語から競馬では、いくらなんでも落差がひどすぎる。孔子が聞いたら気を悪くするだろう。おれが、にやり、としたら、目ざとく見つけて、

「あと一年たてば、バカでもチョンでも、卒業はできる。しかし、大学入学は、そうはいかんぞ」  
なにもおれを見て、バカでもチョンでも、ということはないだろう。

「そこでだ。一年の計は元旦にあり」

と勝手に四月を正月に後退させて、

「ひとりひとりが、この一年の目標を立てるといふのはどうだろう。始業式の日、目標を定めて、初心忘るべからず、千里の道も一歩から、少年よ大志を抱け、学もし成らずんば死すとも帰らず……」

スーバーの目玉なみに、名言を積み上げて、  
「小峰、きみの目標は？」

ときた。冗談じゃない。カップ・ヌードルだって、三分間待つんだぞ、だ。一年の計がインスタントに立つものか。

「どうかな。きみあたりは、英語を基礎からやり直す、なんてのは。中一の教科書を、もう一度、縮くのは楽しいものだぞ」

さては、おれの英語力を、中学生なみと踏んだらしい。なにが悲しくて、回りのヒゲが濃くなった口

を、おっぴろげて、*This is a pen.*と、わめかなくぢやならないんだ。これが侮辱でなくて、なんであろうか。

おまけに、ヒモトクとは、なんていいぐさだ。おれは、そういう優雅なことばを聞くと、ヘソのあたりが、むずがゆくなる体質だ。ヒモトク……紐解く……紐を解く……裸にする。と、こうきちやうんだなあ、どうしても。おれの連想力の早さと飛躍ぶりは抜群だ。コンピュータだって、こうはいくまい。どっちみち繕くのなら、中一のリーダーより、

「葉山志津子だ」

と、おれは、右前の、ちんまりとまんまるい志津子の肩へ視線を注ぐ。

実に、いい線だ。まず、首が細い。首の太い女は、ガマカブタを連想させて、どうにもイカさない。その点、志津子は、半径五センチの直円柱だ。色は白く、すべすべとして、そこへ産毛が、光線の具合で、金にも銀にも光る。今は、淡いピンクだ。このピンクの直円柱に外接する二等辺三角形、つまりセーラー服の襟が濃紺とくるから、配色は絶妙だ。おれの赤い血が滾るのも当然だろう。

次に、こたえられないのが、首から肩へかけての曲線だ。この曲線の素晴らしさを表現するのには、ちよいと手間がかかる。

おれは、この正月、待望のナナハンを手に入れた。中古だが十五万円した。金はバイトでかせいだ。このバイトをめぐって一騒動あったのだが、そいつはまたの機会に譲るとして、このナナハンで高速道路を吹っ飛ばすときこそ、よくぞ男に生まれける、である。

最高なのはカーブだ。カーブにかかると、おれの下腹にギクンと響くものがあって、ヘソから太股へかけての血がシコる。ここで、アクセルを絞っては男がスタる。車体の傾斜角度は、地表に対して五十度。体位は前傾いっぱい。尻の位置が肩より上にこなくぢやならん。息をつめて、目はランランと前

方を注視……。

「なんのことはない。喧嘩ネコが息を吹いてるスタイルだな。それがカッコいいと思ってるとは、バイク・マニアの美的感覚、ひいては知能指数も、知れたものさ」

と片岡紘行は笑うのだが、ガリ勉のカマボコ野郎には、しょせん、わからぬナナハンの味だ。

とにかく、その喧嘩ネコ・スタイルで、カーブを曲がり切ると、おれの下腹のシコリが溶けて、とたんに血の巡りがよくなる。血管は全身を巡っているから、当然のことながら頭の血の巡りもよくなる。したがって、勉強の能率も上がる……はずなんだが、そこまでは、まだ実験していないから、保証の限りではない。

問題は、このカーブの、えもいえぬ、ほどのよさだ。滑るがごとく飛ぶがごとき、時速百キロのタイヤをふんわりと受け止めて不即不離。クロソイド曲線というのだそうだが、走りやすいこと天下無類。設計者を尊敬しちゃうね、おれは。

それに比べると、陸上競技のトラックのカーブは、ありゃなんだ。わざと走りにくいように設計したとしか思えない。あのカーブを公認している陸連のおエラ方は、走りやすくして新記録が生まれたら、自分たちの過去の栄光に傷がつくとも思っているのだろうな。

それはともかくとして、このクロソイド曲線が、志津子の首から肩への線と、びったりなのだ。

手を首筋に当てたら、なんの抵抗もなく、おれの手は肩へ滑るだろう。そして、肩から胸へ。そこに、もうひとつの曲線が待っている。それも、おそらくは絶佳絶妙の曲線であろう、とおれは信じるね。したがって、手は、いささかのわだかまりもなく、その曲線に取りついて……。

よし、とおれは決めた。この一年のうちに、きつと、あのセーラー服を、ヒモ解いて見せる。と、一年の計を立てたとたん、

「どうか。きみが英語を基礎からやり直すというのなら、私も援助は惜しまんが」

エレ公のダミ声で、おれの甘美な連想は、無残にも断ち切られた。

エレ公は、そういうやつだ。いつも、おれと志津子の間へ割り込んでくる。今まで馬に蹴られずに生きてるのが不思議なくらいだ。

## 2

エレ公というアダ名の由来からして、そうなのだ。昨年四月、彼が着任したときのことだ。おれは、志津子と、例によって、肩を並べて校庭を歩いてた。例によって、というところに、注目してほしい。as usual であわけた。つまり、おれは志津子に接近を図って、かなりの線まで成功し、ニアミスのチャンスがうかがうという段階だったのだ。

志津子は、ハイネがどうのこうのと、上機嫌でしゃべっていた。おれは、詩としてはハイネの、ローライ、より山本リンダの、キリキリ舞いのほうが、ずっと好きだなんてことはオクビにも出さず、しかるべく相槌を打っていると、向こうからウッソロ、ウッソロとやってきた見慣れぬやつが、

「Your fly is open!」

と、ポバイが風邪をひいたような声で、わめいた。おれが、あっけにとられていると、

「社会の窓が開いている、という意味だよ」

にやり、と笑って、職員室へはいっていった。おれが慌ててジッパーを引き上げたら、志津子は見えて見ぬふりで、

「こんど来られた英語の先生よ」

と、とりなしてくれたものの、くすり、と笑って、せっかくのハイネの詩情は、どこかへ消し飛んで

しまった。

レディの前で赤恥をかかしおつて、野郎、どうするか見ておれ、とおれは煮えかえる胸を押えて、なにごとも勉強とマメタンを調べてみたが、

「へえ、飛行、飛球。飛ぶ、逃げる、急ぐ」

とあつて、ジッパーのジの字もない。つまり大学受験生としては、社会の窓、という俗な訳語は覚える必要がない、と赤尾好夫先生が保証しているじゃないか。そんなスラングを、高校生のおれに、しかもレディの前で得意げにいうなんて、教師の風上にも置けぬキザな野郎だ。

念のため、図書室で大英和辞典を引いてみると、残念ながら、あつたね。

「洋服のボタンかくし、ピアノの鍵盤の蓋」

ときた。なら、やつの英語はホンモノかな、と感心しかけて、次を見ると、へテントの垂れ幕」ときたのは、おれも参つた、参つた。

テントの、とはいいて妙ではないか。だが、ちかごろは女だつてジーパンをはく。女性に向かつて、

「あなたのテントの垂れ幕が」

では、事実と合わないんじゃないかな。

翌日、おれは、やつが職員用トイレにはいるのを見て、入口で待ち構えていた。待つことしばし。案の定、ひやあ、と奇声をあげ、顔色を変えて飛び出してきた。すかさず、おれは大声を張り上げた。

「Your fly is open! ぎゃまア見ろー!」

オープンどころか、びっくり仰天して格納するのを忘れたものだから、見え、見え、だった。なににも驚くことはないさ。小便器の防臭ナフタリン玉の代わりに、カーバイドの塊を入れておいただけなん

だから。学研の、『ココがねらわれる・化学反応式』の百三十二ページに、



とある。入試頻度は★★★。つまり三十回以上出題されたというのだから、いふなれば、日本の常識だ。そいつを、やつは知らなかったのだから、レベル以下のオツムの主といわれても仕方あるまい。

あの反応は激しいし、臭いも相当なものだ。あれで、くわえ煙草たばこでもしていりゃ、もっとおもしろいことになったかもしれぬ。

だが、おれも驚いた。なにしろ、EYをおっぴろげて、ソウのごときやつを、特出し、しているんだから。おれは、とっさに決めた。やつのアダ名はエレファント。略してエレ公と。

ソウといえは、おれは動物園で、とっくりと観察したのだが、ぶら下がっているべきものがないね。生物の先公に聞いたら、

「純粹な学問上の疑問とは受け取れぬキライがあるが」

と笑いながら教えてくれた。腹腔内に納まっているのだそう。そうならそうと、教科書に書いておくべきだと思うね、おれは。どうも教科書という本は、おれが知りたいことは書かずに、覚えたくないことばかり書いているようだ。だって、そうじゃないか。ソウの、このチン現象のおかげで、タヌキが、そのチャンピオンの名譽を獲得することができたのだから。

Now, let's come to the point.

わからんやつは、国立受験は諦めるんだな。マメタンじゃ、全部が中学必修語だぜ。とはいふもの、おれもわからなくて、エレ公に、そういわれたんだ。閑話休題、だそう。そこで、あだしごとは、さておき――、

志津子の様子が、おかしいんだ。どこが、どうってことはないのだが、そこはそれ、恋するものレバシーってやつなんだな。おれには感じちゃうんだ、彼女、悩んでるな、と。

きみの悩みは、わが悩み。及ばずながら力になりましょう、とカッコよくいいたいのだが、ひよっとして、おれ以外のやつに、ほのかな想い、なんて打ち明けられちゃコトだぜ、と、こんどはおれが悩みかけているうちに、いつものようなエレ公の本年度施政方針演説が終わって、いつものようにホームムーム議長選挙が始まって、いつものようにカマボコ・片岡が立ち上がった。

「H・Rとは、われわれ高三生の話合いの場であり、そこから仲間という意識が生まれ、相互の理解と親睦しんぼくが深まる……」

国連総会か、十か国首脳会談なみの大演説だ。

「このようにH・Rを理解し、その重要性を思うとき、私は……」

満場、総シラケ。おれは腹が立ってきた。エレ公が、そういうのなら、まだわかる。教師としてのタテマエが、そういわすのだから。だが、カマボコがいうことはないだろう。ホンネを吐けばいいじゃないか。H・R議長になりとうござんす、それを地盤にして生徒会長になりとうござんす、チョウと名のつくものなら盲腸でも蝶々ともももでもいといやせぬ、と。だったら、おれだって一票入れてやるさ。どっちみち、だれが議長になったって、どうってことないんだから。

「ズッコケやがって」

と、選挙演説を傾聴する義理はないから、おれは、ホームズこと赤沢郁夫あかざわいくおに目くばせして、立ち上がった。驚いたことに、おれが机を、がたつかせると、志津子も立ち上がった。しまった、こんなことからホームズを誘うのじゃなかった、と思つたがあと祭りだ。三人そろって教室を出た。

カマボコが、恨めしそうな目で見送つた。三票減つたと思つているのだろうが、とんだ思い違いだ。



対立候補の三票が減ったと喜ばなくちゃならんのだ。

### 3

校門を出たが、志津子は肩を落として歩く。その姿は、

「雨に西施がねぶの花、の風情さね」

とおれは『奥の細道』を引用して古典に強いところをチラと披露したが、ホームズは、いい天気だぜ、と空を見上げて大あくびをした。これだから、教養とロマンのないやつとは話がしにくい。

喫茶店へ誘った。志津子を元気づけてやろうというつもりだったが、そうね、と煮えきらず、お荷物のホームズが、

「きょうのところは、きみのゴチになるか」

と相好をくずした。なにが、きょうのところは、だ。いつもじゃないか。

大奮発して、コーヒーにエクレアをつけたのだが、志津子は、

「デリカシイのない男ってキライ。乙女の悩みがわかんないんだから」

とにらみやがんの。冗談じゃない。その悩みを聞いて慰めてやろうと思えばこそその大奮発じゃないか、とにらみ返したら、なによ、こんなもの、とエクレアをおれのコーヒーに突っ込んで、ホロリと一粟。面くらったね、おれは。確か、食前食後に食べてもいいくらいい好きだったはずなんだ。

「どうしたんだい、いったい？」

「私って」

ほっ、と肩で息をついて、

「五百グラムも太っちゃったのよ」